白百合女子大学 児童文化研究センター報 No.48
2021年7月28日

発行 白百合女子大学児童文化研究センター
〒182-8525 東京都調布市緑ヶ丘1-25 TEL 03-3326-7994 FAX 03-3326-1319
http://www.shirayuri.ac.jp/childctr/ e-mail：jido-bun@shirayuri.ac.jp
編集 白百合女子大学児童文化研究センター 印刷（株）南光堂印刷

## 小林夏美氏 博士号取得

本センター研究員である小林夏美氏が、二〇二一年一月七日に博士号（論文博士）を授与されました。児童文学専攻では九人目の博士号取得者です。審査には、審査委員長の秦野悦子先生（本学教授、発達心理学専攻（当時））、指導教員の白井澄子先生（本学教授、児童文学専攻（当時））、井辻朱美先生（本学教授、児童文学専攻）、浅岡靖央先生（本学教授、児童文学専攻）、また外部審査員の佐藤宗子先生（千葉大学教授（当時）、本学非常勤講師）があたられました。

## 博士論文要旨
## 「『語る子ども』としてのヤングアダルト―日本現代児童文学におけるヤングアダルト文学のもつ可能性―」

小林夏美

本論文の目的は、日本のヤングアダルト文学が、ヤングアダルトの語る力の獲得を「語る子ども」として生き延びる形で描き出していること、それにより、日本の現代児童文学に子どもと大人の区分に対する新たな視座をもたらしていることを明らかにすることである。

これまで、ヤングアダルト文学は従来の児童文学の対象年齢より高年齢であるティーンエイジャーを読者層、ないし作品の焦点化の対象とする作品群として、その年齢層の独立性が意識される形で理解・言及されてきた。だが、一九七〇年代半ばからの「タブーの崩壊」現象を背景にその展開を捉えたとき、それは大人像の不確かな中、大人になるという課題に子ども概念と関連をもつ形で焦点化することで、子どもと大人の区分自体を新たな形で捉える視座を模索するものとも考えられる。本論文では、この視座の存在を明らかにするため、日本の創作ヤングアダルト文学作品のうち、大人になるという課題そのものを問いに付す展開をもち、その問いを語る力の獲得の問題として描き出している四作品に焦点をあて、そこに、ヤングアダルトが大人になるのではなく「語る子ども」として生き延びる可能性を読み解いた。

具体的な作品の読解に先立ち、まず、ヤングアダルトの直面する大人になるという課題、およびその直面に際した語る力の獲得の問題を子ども概念との関連から理論的に検討した。

第一に、「タブーの崩壊」以後に児童文学と関連する形で子どもと大人の区分に対する新たな視点を提示した、本田和子『異文化としての子ども』の議論を、「異文化としての子ども」を語る本田自身の語る行為に着目する形で再考し、そこに導き出される子どもが語ることの困難と可能性について、サバルタンの語りに関する議論と関連づけて考察した。竹村和子がサバルタンに関して論じている、共通性と差異との間の往還の中で「翻訳の（不）可能性」として展開される「翻訳のパフォーマティヴィティ」を、子どもが語る可能性への示唆と捉え、この可能性を「語る子ども」という形象によって提示した上で、その「語る子ども」としての語る力の獲得をヤングアダルトの語る力の獲得の可能性として論じた。

第二に、アメリカの作品を対象にヤングアダルト文学を権力と抑圧の観点から読み解くR. S. Triesの*Disturbing the Universe*の議論に焦点をあて、先に示した「語る子ども」の可能性の所在を、大人になるという課題との関連から考察した。Triesの論が、「大人になる」ことの問題を主体化＝服従化の問題と重ね合わせて提示している一方、それを超え出る行為能力については十分に論じていないことを指摘し、この点を主体化＝服従化に関するジュディス・バトラーの議論を参照することで再整理した。バトラーが、主体形成の局面を二者関係に着目して再考する中、その関係に導かれる責任＝応答可能性に主体化＝服従化を超え出る行為能力の基盤を見出していることを確認し、この責任＝応答可能性を、竹村の論じる「翻訳のパフォーマティヴィティ」の基盤として考察した。これを、作品を読み解く際にたんに「大人になる」ことと、「語る子ども」として生き延びることとの読みわけを可能にする視座として論じた。

次に、この視座をもとに具体的な作品の読解を行った。

まず梨木香歩『西の魔女が死んだ』について、この作品が「魔女修行」を通じた主体形成を肯定し「大人になる」ことを最終的に必然化していること、他方おばあちゃんとの二者関係への意識によって修行への誘導に抗う主人公まいの姿を描き込み、「大人になる」こと自体を問う意識をも提示していることを読解し、両者の意識の狭間で忘却すべきものとして逆説的に「語る子ども」の姿が示されていることを論じた。


ISSN1345-5400

次に岩瀬成子『もうちょっとだけ子どもでいよう』に関し、妹の咲、姉の光、母の康子それぞれの覚える鬱屈が、三人の立ち位置の相違を示す一方で関連性をも示していること、その子ども－ヤングアダルト－大人の立場の相関性の中に、光の抱える「大人になる」ことへの困難が捉えられていることを読み解き、その困難を脱して語る力を獲得する可能性が、同種の困難の中にある者への責任＝応答可能性に見出されていることを示した。

梨屋アリエ『スリースターズ』については、ヤングアダルトの姿に焦点を絞った展開の中、一見円満な状況にある三咲季との対比において、裕福でも極度の疎外状態にある弥生が「大人になる」ことの問題を前景化する存在となっていることを示し、その弥生の語りに関する困難を超え出る可能性が、同種の困難に直面する水晶の姿を通じ、未知性をもつ相手への責任＝応答可能性に基づく、共通性と差異とを往還する「翻訳のパフォーマティヴィティ」に見出されていることを論じた。

さらに、いしいしんじ『麦ふみクーツェ』に関し、「ぼく」がおじいちゃんに仕込まれたねこの声を自分自身の声として受けとめ直す過程を、聞きとった音や声に対する責任＝応答可能性、とりわけ差異の際立つ存在である「へんてこ」たちへの責任＝応答可能性に基づくものとして読解し、そこに「翻訳の(不)可能性」としての「翻訳のパフォーマティヴィティ」が読み取れることを指摘した。

以上の読解によって浮かび上がった「語る子ども」の可能性について、最後に、その語りの行為性が子どもと大人の区分を超え出る性質をもつことを確認した。ここに、ヤングアダルト文学が日本の現代児童文学にもたらす子どもと大人の区分に対する新たな視座の存在を指摘し、これをもって本論文の結論とした。

〔研究員〕

## 白井澄子先生に感謝のメッセージ

二〇〇一年四月より白百合女子大学児童文化学科にて教鞭を執られ、二〇一二年度から二〇一八年度まで本研究センター所長を務められた白井澄子先生が、二〇二一年三月をもってご退職されました。ご退職後は本学非常勤講師および本研究センター客員所員としてご助力くださっています。

### 先生は魔女ですか？

佐々木裕里子

白井先生が白百合に着任されたのは、私が博士課程に入学した年でした。

先生のことは以前から存じあげていたものの、それまで面識がなかったことや、今後の指導をお願いするにあたり、研究テーマを変更していた不安もあり、ご挨拶の時に大変緊張していたことを思いだします。

しかし白井先生は、朗らかで、爽やかで、晴れやかで、大変輝いておられました。そのお姿に一瞬で心をつかまれた私は、先生が私のために白百合に来てくださったのではないかと、幸せな勘違いをしたまま院生生活を送ったのでした。

大学院をでてから、ご縁があって白百合に勤めることとなり、今度は一教員として白井先生のおそばで仕事をさせていただいたのですが、その期間にわかったことは、先生が隠れ身の術を使えるということでした。

急ぎの用事で、授業中の先生を教室の外で待ち伏せたことがあるのですが、目を凝らして待ち構えていたにも拘らず、いつ教室からでられたのか、通りすぎたのか気がつきませんでした。驚くほど学生さんたちの中に紛れて教室を後にされているのです。学生さんたちが談笑しながら教室をでていく中にすっかり溶けこんでおられるので、気がつけば教室がからっぽになっていて、慌てて廊下を走ったものでした。廊下ですれ違った時に、学生さんだと思って暢気な挨拶をしそうになったことも数知れず。

つまり、白井先生はいつでも溌剌としていて、颯爽としていて、軽やかなのです。体調のすぐれない時もあったはずですが、そのようなお姿はまったく記憶にありません。これだけの瑞々しさを湛えておられるのは、先生が魔女か何かだからに違いないと思うのですが、証拠はつかめておりません。

そんなお姿にあこがれ、「一生ついていきます」と申し上げたら、にこやかに「いやよ」と即答されたことのある私ですが、これからも宣言通り一生ついて参ります。どうぞよろしくお願いします。

〔本学非常勤講師・研究員〕

### 白井澄子先生のご退職によせて

岸野あき恵

昨年度の白井澄子先生のご退職に際し、コロナ禍にあって直接のご挨拶がかなわず、大変申し訳なく、また誠に残念に思っております。

白井先生が本学の児童文学専攻に就任された次の年に、私が博士課程に入りまして、白井先生に指導教授に

なっていただけたことは本当に幸いでした。白井先生はご多忙な中、いつも温かく励まし、ご指導くださいました。今、改めて先生の存在の大きさを思い返しまして、感謝の念に堪えません。

白井先生と、本学の研究奨励を受けて行った『児童文学における「笑い・ユーモア・ナンセンス」研究会』に加わらせていただいたことも得難い経験となりました。私にとっては、笑いやユーモアの観点から児童文学作品を詳細に分析し、作品の中で果たしている効果を考察する、またとない機会となりました。研究に使用する図書を購入するため児童書専門書店に行って、先生や研究会のメンバーの方々と一緒にあれやこれやと書籍を選んでいったり、帰りに楽しく茶飲み話をしたことなども、懐かしい思い出となっています。

白井先生からは、研究のことだけでなく、お人柄からも多くのことを学ばせていただいたと感じております。今後も、厚かましくはありますが、学会等で、引き続きご指導を賜りたく願っております。

コロナ禍が収束して、メールやZOOMの画面越しではなく、直接お会いして沢山お話しを伺える日が再び来るのを、心待ちにしております。

〔研究員〕

## 白井先生の笑顔と楽しむ姿勢

酒井志麻

白井先生に初めてお会いしたのは、大学院入試の面接でした。緊張する私に、先生が励ますように笑顔を向けてくださったことを、昨日のことのように覚えています。それ以来、先生の笑顔にいつも励まされ、勇気をいただきながら、白百合での日々を過ごしてまいりました。大学院在学中、授業についていくのに必死で余裕を失くしていた私は、笑顔で楽しそうに作品について語られる先生のお姿に、児童文学は楽しい、ということを思い出させていただきました。そして、研究を楽しむという姿勢を教えてくださったのも先生です。指導教員として修士論文をご指導いただくことになり、最初の面談で論文のアイデアをお見せした時に、先生がおっしゃった「これじゃあ、面白くないじゃない？」というお言葉は衝撃でした。論文を書くことが初めてだった私は、既存の考えをなぞるようなアイデアを書き連ねていました。しかし、先生は用紙の隅に思い付きで書いた言葉を拾って、思いもよらなかった方向へと導いてくださいました。出来はともかく、修論を書く過程を楽しむことができたのは、研究とは、面白い視点を持って、楽しんで取り組んでいいものなのだ、ということを教えてくださった、先生のご指導のおかげです。

もうひとつ、先生からいただいた忘れられないお言葉があります。二〇〇五年、テロの最中にイギリスへ留学することになった私を、先生は「アカデミズムが暴力に負けてはいけない」という力強いお言葉で送り出してくださいました。かつてご自身も留学された先生の、学問へのひたむきな強い思いを感じたこのお言葉に、覚悟を決めることができました。このように、いつも朗らかな笑顔を見せてくださるだけでなく、凛とした強さをお持ちの先生は、私だけでなく、すべての教え子にとっての憧れです。先生のような素敵な人に少しでも近づけるよう、精進してまいります。長い間、ご指導くださいまして、ありがとうございました。

〔助教〕

# センター構成員活動紹介

本研究センター研究員の永島憲江氏は、二〇二〇年十一月にE・H・シェパードの*Drawn from Memory*の日本語訳『思い出のスケッチブック　『クマのプーさん』挿絵画家が描くヴィクトリア朝ロンドン』（国書刊行会）を出版されました。今号では本書の翻訳について、ご寄稿いただきました。

## 出会いに感謝

永島憲江

児童文学の世界で有名なクマの姿を描いたイラストレーター、E・H・シェパードが自伝的エッセイを書いていたことを、大学時代の恩師から教えてもらうまで、勉強不足のわたしはまったく知りませんでした。たまたまご連絡さしあげたとき、とてもよい本だと思うからどこかに持ちこんでみてはどうだろうか、と言われ、ご蔵書を送ってくださったのが、この本との出会いでした。届けられた小さなペーパーバックを早速読んでみると、十九世紀末イギリスの日常生活の細やかな描写、その当時に書かれていた児童文学の物語世界そのものと思えるエピソードの数々に驚かされました。そこで語られていたのは、将来はすぐれたイラストレーターとなる少年が見つめたイギリスの様々な姿を反映したものでした。昨今好まれる傾向があると思われる展開の早い物語とは異なる、シェパード少年の愛した日々にゆったり浸れる雰囲

気、時折はさまれるイギリス人らしいほのかなユーモア、そして数々の楽しい挿絵がとても魅力的に思えました。たいへんありがたいことに、この本にご興味を持ってくださった出版社さまのおかげで、翻訳する機会を頂けました。

これまで翻訳の機会を頂いたときは、編者の先生方や先輩方、共訳の先生、という頼もしい指揮官たちのもとで作業を進めてこられました。しかし初めてひとりでの作業となった今回は、訳語をひとつひねり出すのでも緊張と苦労のしどおしでしたが、編集者の方の的確なコメントのおかげで何度も助けていただきました。また、調べてもどうしても納得ゆく答えが見つけられなかった箇所については、勉強会のときからお世話になった先生方、院の先輩などにメイルで質問すると快く応じて頂きました。本当に感謝しております。そのときは児童文学という共通の興味で結びついたネットワークの強さを、インターネットを通じてしみじみ感じました。

『思い出のスケッチブック』というタイトルは、ありがたいことにわたしの提案を受け入れてもらったものです。学生の頃から、論文や課題エッセイのタイトルをつけるセンスがまったくなかったので、自分の案を採用してもらえたのは素直にうれしく思いました。七歳くらいの男の子、いわゆる小学生男子くらいの目線での思い出の数々は、訳しているこちらも愉快な気分になり、わくわくするようなものばかりでした。シェパード少年のお気に入りの場所、大切な知り合い、大好きな宝物などを見せてもらい、教えてもらった気分になれました。数あるお気に入りエピソードのひとつは、菓子パン係の場面です。このような作品に関われたことと、作品を通してのひととのつながりに、あらためて感謝する日々です。

〔研究員〕

## アンケート「オンラインでの研究発表について」

昨年度は、博士論文公開審査会、センター構成員発表会および修士論文発表会をZoom（Zoom Cloud Meetings）にて開催しました。

当時の発表者の方々にご協力いただき、アンケートを実施しました（対象者七名、うち回答者四名）。質問と回答は、以下の通りです。

**一、オンラインで発表するにあたり、いつもより気を付けたことを教えて下さい。**

〈準備のとき〉

・スライドを捲る速さや、喋りが聞き取りやすいように練習すること。

・パワーポイントをシンプルに分かりやすく作成したこと。

・配布レジュメ、パワーポイント、読み上げ原稿それぞれに載せる情報のバランス。

・対面であればWordでレジュメを作成したと思うが、画面共有したときに見やすいよう、パワーポイントを使用した。視聴者の利用デバイスや画面サイズが分からないので、字のサイズをあまり小さくしないこと、一枚のスライドに載せる分量を多くし過ぎないことも意識した。

〈発表中〉

・お腹の底から声を出して、聞き取りやすく話したこと。

・時間配分を気にしながらも、視聴者に伝わるようにハキハキと発表したこと。

・はっきり喋ること、発表中はどこを見るのか（カメラか、Zoomで映したパワーポイントか、画面か）意識すること。

・事前の配布資料なし、当日発表のみだったため、視聴者を置き去りにしないよう、早口にならない（できればゆっくり話す）よう気を付けた。参考文献リストのスライドは、ある程度は目を通せるよう、意識的に数秒間は黙って提示したままにした。

・ネットの接続を安定させること。

**二、オンラインの発表で良かったことがありましたら、教えて下さい。**

・発表中は顔を表示して話しているのは自分だけだったので、あまり緊張せずに進めることができたこと。

・自宅から発表したため、会場への移動時間が省けた。

・聴いている方の表情が分からないので、かえって緊張しなかった。パソコンに向かって話す形は、気が楽だった。

・アンケートの結果を頂けて嬉しかった。聴いている方がカメラオフだと、自分の発表への反応や評価が分からないため、アンケートは本当にありがたかった。

・眼前に聴いている人がいないことで、緊張が少し緩和され、発表に集中しやすかった。対面での発表より（さらに）分かりやすさを意識するようになったことで、結果として内容の整理が進んだ。

**三、オンラインの発表で困ったことがありましたら、教えて下さい。**

・初めのほうでパソコンの画面がフリーズしてしまい、スライドを出すのが大変だったこと。
・ネット環境が良くなかったため、自分以外の発表者の声が聞こえなかったり、自分が発表する際もちゃんとパワーポイントが表示できなかったのが大変だった。
・発表後、パソコンがフリーズした。Zoomはマイクオンもカメラオンも退出も出来なくなった（後半は予備のパソコンから参加）。このようにフリーズすると、問題が生じていると伝えることも出来ないので困るなと思った。
・聴いている方の表情や反応が分からないため、「この発表で大丈夫だったのか…？」といつまでも不安。「場の空気」がないので読めない。
・今回の発表では問題なかったが、資料の提示がほぼパワーポイントを介してのみとなってしまうのは、今後を考えると困ることもありそうだなと感じた。実物を提示したり、映像を見せたりする形の発表はなかなか難しいように思う。

**四、新型コロナウイルス感染症収束後も、オンラインでの研究発表をしたいですか？　また、その理由を教えて下さい。**

〈したい〉…三名（「対面での発表もしたい」を含む）
・あまり緊張せず、また場所を問わずにできるため、やりたいと思う。
・あまり緊張しない。服装などを考えずにいられる。遠方の方にご参加いただける。様々な方をご招待しやすい（参加への敷居が低い？）。紙の資料を用意しないので印刷の手間がない、部数を考えずに済む。
・準備の仕方には慣れが必要だが、人前に出る緊張があまりないという点がすごくありがたかったので、オンラインの方が発表しようかな、したいなという気持ちが起こりやすい。また、会場に赴く必要がないので、遠方での開催で往復すること自体が負担、といったことがないのも大きいと思う。

〈したくない〉…一名
・対面だとトラブルがなく、スムーズに発表できるため。

**五、現在、研究活動でオンラインツールを使っていますか？　それはどのようなものでしょうか？**

〈使っている〉…三名
Zoom・Google Meet・電子ジャーナル・学術情報データベース・機関リポジトリ・デジタルアーカイブ・図書館への入館申請・論文の遠隔複写申し込み

**六、将来、ご自身の研究活動でZoomなどのツールを活用するとしたら、どんな場面が考えられますか？**
**（選択式・複数回答）**
・生活の変化（育児や介護など）に応じた、在宅での研究交流…三名
・留学先から勉強会（プロジェクトなど）に参加…二名
・就職後も勉強会（プロジェクトなど）に参加…一名
・その他（就職や留学等に関係なく、勉強会・読書会の開催に利用する可能性はあると思う）…一名
・その他（他大学との研究交流、海外との研究交流）…一名
・特に使用するつもりはない…一名

**七、リアルタイムで繋がるツールで、お勧めのものや試してみたいと思うものがありましたら教えて下さい。**

Google Meet（二名）・Cisco Webex Meetings・Microsoft Teams

**ご回答くださった皆様に心よりお礼申し上げます。ありがとうございました。**

※アンケート結果を掲載するにあたり、個人が特定されづらいよう、文意に大きな影響を及ぼさない範囲で回答の表記の仕方に改変を加えました。

## プロジェクト活動報告

児童文化研究センターでは、センター構成員による研究の促進を目指し、プロジェクト制度を設けています。二〇二一年度は、次の四つのプロジェクトが活動しています。

### 小波日記研究会（小波日記を読む）

（研究代表　猪狩友一）

巖谷小波日記（センター所蔵の複写資料）の翻刻・研究を継続しておりますが、二〇二〇年度は、新型コロナウィルス流行の影響で対面での研究会は開けず、続きの翻刻・注釈も「児童文化研究センター研究論文集」に発

表することができませんでした。しかし、二〇一九年度に引き続き、国語国文学専攻の大学院生に注釈等の手伝いをしてもらったので、今後その成果も生かしていければと考えています。二〇二一年度は、オンラインで研究会を催し、改めて明治三十九年～四十年の日記を読み進めて参りたいと思います。

## 近現代児童詩歌研究

（研究代表　宮澤賢治）

本プロジェクトの活動成果をまとめた『児童詩歌』は、十六号となりました。第一号から続く「賢治と童謡」も十六回目の連載となり、今回はこれまでの総括として賢治の童謡活動を振り返り、その実態に言及しています。「早稲田文学社編『少年文庫』に関するノート」は、小川未明・竹久夢二・相馬御風らが関わった『少年文庫』の童謡について、七人の作家と作品を検討しています。「中川ひろたかの「あそびうた」研究」（五）は、『あそびうた本・かえるのロボット』の作品考察をしながら、中川の創作姿勢・活動の方向性を確認しています。

今年度も研究会開催の時期や手段を検討、適宜対応しながら、近現代児童詩歌への、細く長い研究活動を各人続けていきたいと思います。

## 紙芝居研究

（研究代表　浅岡靖央）

昨年度は、新型コロナウィルス感染拡大による大学封鎖とも言える状況下、残念ながら一度も月例研究会を開催できませんでした。そうした中、至近距離で演じられる紙芝居において、演者の口から発せられる飛沫は避けられないわけで、果たして紙芝居は今後メディアとして生き残れるのだろうかという危惧さえ、個人的には覚えました。しかし、希望を失ってはいけない。いつか紙芝居を普通に楽しめる時がやってくることを信じて、今は地道に研究し続けていこうと思います。というわけで、『紙芝居研究』第四号も、一昨年の日本児童文学学会研究大会で開催したラウンドテーブルを文字化して掲載しました。今年度も未だ研究会開催の目途は立ちませんが、それでもメンバー一人ひとりが研究を進めることで、『紙芝居研究』第五号の発行をめざします。

## ちりめん本研究

（研究代表　間宮史子）

二〇二〇年はメンバーが個別の研究をすすめ、三本の論考が発表されました。尾崎るみ「弘文社のちりめん本『欧文日本昔噺』シリーズの形成と『西洋昔噺』シリーズの開始」（『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集　二四』）、柏村裕子「ちりめん本『日本昔噺』シリーズと『燕石雑志』――『猿蟹合戦』『花咲爺』『勝々山』の典拠として――」（『昔話の研究と継承　小澤俊夫先生卒寿記念論文集』）、同「ちりめん本　英語版とスウェーデン語版の比較」（『児童学研究――聖徳大学児童学研究所紀要――二三』）です。本年も、メンバー各々のアプローチにより、ちりめん本研究に新たな側面が浮かび上がることを期待しています。

# センターからのお知らせ

## 新任の先生方と新しい助教・助手

本学児童文化学科で二〇年間、教鞭を執られた白井澄子先生がご退職され、新たにお二人の先生、水間千恵先生と菊地浩平先生が着任されました。

センターでは、五年の任期を満了された八代華子先生に代わって酒井志麻が助教に就任し、若谷苑子が新たに助手に就任しました。

## 構成員研究発表会

児童文化研究センターでは二〇一二年度より主催研究会の一つとして「構成員研究発表会」を開催し、児童文学専攻の博士課程（後期）に在籍する三年生が中心となり、研究発表をしています。詳細は児童文化研究センターホームページなどでお知らせいたします。興味のある構成員の方は、是非ご参加ください。

## センターブログと書評コンクール

センターブログ（http://jido-bun.blogspot.com/）は、当センターからの情報発信及びセンター構成員による自由な投稿の場です。皆さまからのご投稿を随時募集しております。原稿はメールにて受け付けております。どうぞご活用ください。また、二〇一九年度より、ブログ上で書評コンクールを開催しております。開催時期が近づきましたらメーリングリストなどでお知らせいたしますので、是非ご参加ください。

## センター構成員一覧

（二〇二一年七月現在・敬称略）

**所長**
浅岡靖央

**運営委員**
浅岡靖央　石井直人　井辻朱美
菊地浩平　間宮史子　水間千恵
森下みさ子　やたみほ

**所員**
浅岡靖央　猪狩友一　石井直人
井辻朱美　菊地浩平　間宮史子
水間千恵　森下みさ子　やたみほ

**客員所員**
小澤俊夫　白井澄子　神宮輝夫
松井千恵　宮澤賢治

**助手**
酒井志麻　宇佐美奈麻子
遠藤知恵子　若谷苑子

**客員研究員**
生駒幸子　西村醇子

**委嘱研究員**
木村八重子　竹田修

**研究員**
石元みさと　伊藤かおり
尾崎るみ
金子真奈美　岸野あき恵
倉田恵理子　小林夏美
佐々木江利子　佐々木裕里子
沢崎友美　志村裕子　鈴木あゆみ
鈴木宏枝　鈴木律子　髙原佳江
中川理恵子　永島憲江　浜名那奈
半田涼太　柗村裕子
宮崎麻子　八代華子　山本麻里耶
劉冠玟　和田啓子

**準研究員**
安達愛　黒川夏帆　奈良田和華

**院生（博士課程（後期））**
阿部泉　グラントウ、カトゥリーナ
孔阳新照　西村明恵　沼本知自
日暮英里佳　三井彩愛　山越夢子

**院生（博士課程（前期））**
大橋珠美　勝又芽依
原田優香　雷琼玉

## 編集後記

二〇二一年度はセンター運営委員の先生方やセンターのスタッフの交代から始まりました。これまでお世話になった白井澄子先生、そして、八代華子さんに心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

感染症流行の影響でまだまだ落ち着かない日々が続きますが、まずは元気に、センターでの業務に従事してまいりたいと存じます。

児童文化研究センターは、児童文学・児童文化研究者の皆様の研究・発表・交流の場として、事業の維持と益々の充実を図ってまいります。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

（酒井・宇佐美・遠藤・若谷）

## 児童文化研究センター
## 夏期閉室予定日

| | |
|---|---|
| ～7月30日（金） | 9：00～17：00（平常開室） |
| 7月31日（土）～9月19日（日） | 閉　室 |
| 9月20日（月）～ | 9：00～17：00（平常開室） |

上記の日程は変更することがございます。
ご了承くださいませ。

# 『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集25』原稿募集

児童文化研究センターでは、児童文学・文化研究の活性化を目的として、年に一度、研究論文集（査読制）を発行しています。刊行された研究論文集は、児童文学・文化関連の研究者及び研究機関等に寄贈しています。

以下の要領で『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集25』（二〇二二年三月発行予定）の原稿を募集いたします。ご投稿をお待ちしております。

## 締切

二〇二一年九月二九日（水）正午必着

## 提出物

① 表紙（論文題目、氏名、構成員の身分、郵便番号、住所、メールアドレス、文字数、投稿区分（研究論文／研究ノート）、申告事項（あれば）を記載）

② 本文（参考文献、注、図、表等を含む）

③ 論文要旨（300字以内、論文題目を併記）

④ 欧文要旨（採用決定後、100 words以内で提出。欧文題目を併記）

以上、①～③について、プリントアウト各一部及びデータを提出すること。

## 提出先

〒一八二―八五二五
東京都調布市緑ヶ丘一―二五
白百合女子大学　児童文化研究センター　宛

## データの送付先

〈cendo@shirayuri.ac.jp〉
研究論文集担当　遠藤知恵子

## 審査規定（センター規定より抜粋）

＊ 研究論文集審査のための編集委員会を設置する。

＊ 編集委員は所長が依頼した、本学専任教員またはそれに相当する者から構成される。

＊ 投稿原稿は編集委員会の審査を経て、許可されたものが掲載される。

## 投稿規定

一. 執筆者は原則として児童文化研究センター構成員とする。

二. 児童文学・文化に関する研究論文、研究ノートを対象とする。

【研究論文】先行研究に加えるべきオリジナリティーのある研究成果が明確に述べられているもの。

【研究ノート】資料の紹介・精査、論点・仮説の予示、既存の仮説の検証作業、研究の中間報告等、優れた研究につながる可能性のある内容が明確に記述されているもの。

三. 投稿に際して、審査を希望する投稿区分を明記する。ただし、審査結果によって、区分は変更されることがある。

四. 表紙、本文、論文要旨、欧文要旨はマイクロソフト社のワードで提出する。

五. 本文のフォントサイズは10・5ポイント、用紙サイズはA4判、文字数と行数は40字×30行となるように設定する。縦書きの場合、用紙の向きは横とする。本文の枚数は20枚以内とする。

六. 参考文献及び注は本文末に一括する。

七. ページ番号を本文の中央下に付す。

八. 本誌に掲載された著作物の著作権は著者に帰属する。当該著作物は、「クリエイティブ・コモンズ表示-非営利-改変禁止4.0国際（CC BY-NC-ND 4.0）ライセンス」及びその後継版のもと、白百合女子大学学術機関リポジトリで公開する。なお、執筆者がその他のクリエイティブ・コモンズ・ライセンスの選択を希望する場合は、原稿採用後に、その旨を「学術リポジトリ「内容記述」記載データシート」に記載すること。執筆者が当該許諾に同意しない場合は、その旨を「学術リポジトリ「内容記述」記載データシート」に記載すること。その意思表明のない場合は、同意したものと見なす。

※ 書式の細部については*MLA Handbook*最新版及び過去の研究論文集を参照のこと。

## 審査結果発表

二〇二一年十月中旬

## 注意事項

a. 完成原稿を投稿する。

b. 原則として、数字は、横書きの場合は半角英数字、縦書きの場合は漢数字を用いる。いずれの場合も半角カタカナを使用しない。

c. 特殊記号、飾り文字、不必要なスペース等をなるべく使用しない。

d. 図版を掲載する場合、引用要件を満たし、出所を明示する。

e. 画像は鮮明なものを使用する。高度な印刷技術を必要とする場合は、実費自己負担となることもある。

f. 学会等で口頭発表したものを投稿する場合は、その旨を本文末に記載する。

g. やむなく投稿規定を逸脱する場合は、その旨を表紙に記載して申告する。その内容は編集委員会で審議される。

h. 採用した原稿についての著者校正は初校、再校のみとする。著者校正での誤字脱字以外の加筆修正は原則として認めない。

i. 不明な点については、研究論文集担当者に問い合わせの上確認する。